

# 共生・協働の地域社会づくり

鹿児島県内で元気に共生・協働に取り組む団体を紹介します。



▲田んぼ探検隊。子どもたちも泥んこになりながら田植えを体験。

NPO法人鹿児島県有機農業協会は、この有機農業の認定を行う機関であり、有機農業を消費者にPRするための活動を行う団体でもある。事務局長大和田明江さんにお話

## 有機栽培のよさを知ってください。

食の「安心・安全」が注目されるこの頃、「有機栽培」「オーガニック」という言葉をよく耳にするようになった。

「有機」「オーガニック」という表示は、有機JAS法により定められた厳しい有機栽培の基準をクリアしたもののだけにつけることが許されている。たい肥などで土づくりを行い、栽培中はもちろん、種まきの2年以上前から、農薬や化学肥料を使わない田畑で栽培していること、遺伝子組み換え技術を使わないこと。また、農林水産省に登録された機関で認定を受けることも定められている。

をうかがった。

「有機農業は戦後、国や農協がすすめるようになった化学肥料や農薬を使う農業の、健康や環境への影響を心配する人たちによって70年代から少しずつ始められていたのですが、周囲からは『勝手なことだし』だと思われていました。生産者同士が手をつなぎ細々と続けてきたのです。ところが、1999年に世界保健機関(WHO)で有機農産物に関する国際基準ができると、日本もこれを批准し、2001年には有機JAS法が定められました。これにより『有機』『オーガニック』という言葉は広まりましたが、実態が伴っていないのが現状です。日本の農産物のうち、有機農産物の割合は0・16%ほど。2年前に有機農業推進法ができ、国や自治体もやっとな力を入れ始めたというところですよ。たい肥を使った土づくりや、手で草を取るの大変な作業。しかし、せつかく苦勞してつくった野菜も見た目がきれいでなかったり、高いというイメージがついていたりするためか、思ったほど売れていないという。

県有機農業協会では、自然の恩恵を受けてつくられる有機農産物の良さを知ってもらおうと、県や国とも協働して、さまざまな活動を行っている。「田ん

## 鹿児島県有機農業協会

鹿児島市

NPO法人

《問い合わせ》0909(258)3374



▲オーガニックフォーラム。「自分の食生活を見直す良いきっかけになりました」と参加者。



▲オーガニッククッキング。子どもたちも郷土料理に挑戦。

ば探検隊」では、田植えや稲刈り、生き物調査をとおして、食べ物をつくる土の大切さを学ぶ。「オーガニック・クッキング」は旬の有機野菜を使った料理教室。「オーガニック・フォーラム」では「食」「環境」を基本に、生活に密着したテーマでシンポジウムや講演会などを行っている。これらのイベントに参加した人たちは、有機農産物のファンとなってくれるが、まだまだ数が少ない。

「人間は自然の一部。だから、できるだけ自然のサイクルから外れない食べ方、生き方が大切なのではないでしょうか。有機栽培は自然のサイクルを大切にしなければなりません。そうやってつくられた旬の野菜は栄養分が凝縮されていて、おいしいんですよ。もっとたくさんの人に食べてもらっておいしさを実感してほしいですね。」

大和田さんたちは、「有機農産物のファンを増やしていくことが有機農業を広めていくことにつながる」と日々奮闘中だ。



事務局長大和田さん(中央)とスタッフの皆さん

土・水・環境を汚さない有機農業のよさを広めていきたいです。  
<http://www.koaa.or.jp/>

## 共生・協働の地域社会づくりやNPO法人に関するお問い合わせ先

◎共生・協働推進室(県庁市町村課内) ☎099-286-2241  
 ◎共生・協働センター(かごしま県民交流センター内) ☎099-221-6605  
 関連情報は、県ホームページの「共生・協働(NPO・ボランティア)」にも掲載しています。

鹿児島市

NPO法人

《問い合わせ》099(209)0290

## ◎NPOやしま

### ネットワークを生かした多彩な活動

「体調は良好です。色々な人と出会い、毎日が充実しています」。そう笑って話す橋口堅事務局長。かつて金融機関に勤めるサラリーマンだった。ストレスから病を患い、退職を余儀なくされた。そういう時、高校の同級生であった現在の橋口勝理事長からNPO法人の手伝いを打診され、第二の人生を歩み始めたのが約2年前。

NPOさつまは、平成15年に橋口勝理事長を中心に県内のNPO法人が集まり、「NPO法人の事業活動を支援する」ことを大きな目的として設立。活動初期から、NPO法人相互のネットワークを生かし、県内全域で活動を展開してきた。

NPOさつまの特徴は、「NPOのためのNPO」。理事には、環境、福祉、まちづくりなどさまざまな分野のNPO法人の代表、大学教授、マスコミ関係者が名を連ねる。それぞれ本業およびNPO法人の活動をしながら、NPOさつまの活動にも参画している。「理事の皆さんは、忙しい方々ばかりですが、フットワークが軽く、新しいアイデアを出していただくので、そのアイデアを行政に提案したりしています」と事務局長。

活動は設立当初の大きな目的であったNPO法人の事業活動の支援に止まらず、年々拡大している。現在、「薩摩琵琶の普

及、「むらづくり」、「介護サービスの公表に係る調査」、「グループホームの外部評価」を中心に活動中。なかでも薩摩琵琶の普及には力を入れている。全国のネットワークを生かし「さつま琵琶普及の会」を設立。特別顧問は歌手の小椋桂さん。小椋さんからさつま琵琶を寄贈された。2ヶ月に1回、事務所できつま琵琶講習会を開催しているほか、薩摩琵琶ユニット「坂田美子&ピカム」のコンサートを県内各地で開催。今後、コンサートで小椋さんを特別ゲストで招くことも予定している。また、現在NHK大河ドラマ「篤姫」でも薩摩琵琶の調べが流れる。「さつま琵琶は一回聞いていただくとその良さが分かります。もともととつと広めていきたいですね」と事務局長。



▲小椋桂さんから寄贈されたさつま琵琶。さつま琵琶講習会を行うスペースに設置してある。



▲農家の自宅でむらづくり研修会。グリーンツーリズムについて意見交換した。



▲薩摩琵琶ユニット「坂田美子&ピカム」のコンサート風景。今後も県内各地で開催を予定している。

また、「むらづくり」については、県からの委託事業として、平成18年度に、むらづくり協働体制の構築および協働活動の強化を図ることを目的にむらづくりに参画可能なNPO法人等のリスト化やむらづくりメニューの整理などを行い、平成19年度に、地域特性を生かしたグリーンツーリズムの展開を目的にグリーンツーリズムの推進に取り組み個人や団体を対象とした情報交換会などを行っているところである。これらの活動では、NPOのネットワークが生かされ、NPO法人やボランティアなど地域内外の多様な人材がむらづくりに参画できる仕組みづくりにつながっている。

今後の活動については、「今後も地域の活性化、まちづくり、むらづくりなど多方面で地域に貢献していきたい」と語り、活動の更なる拡大が大いに期待される。



事務局長 橋口堅さん

これからもネットワークを生かして、やれることは積極的にやっていきたいですね。  
<http://www.minc.ne.jp/satsuma/>